博物館図書館（室）について

吉　岡　義　信

昨年の７月、私立大学図書館協会の総会・研究会が神奈川大学で行なわれました。いい機会なので市内の図書館や博物館を何ヶ所か見学しました。その時のことは、司書講習生の文集に「よこはま図書館・博物館見てある記」と題して載せています。ここでは、その時気付いた博物館付設の図書室について少し調べてみることにしました。まずはきっかけとなった施設について概略を述べてみたいと思います。

【横浜美術館美術図書室】

美術館の一角にあり開架資料（和書・参考書・新刊雑誌）以外に、１万冊の洋書、３万冊の展覧会カタログ、２万冊の雑誌類が閉架資料としてあり、また美術の教科書1297冊と美術教育関係　資料664冊からなる中村文庫も特別資料として所蔵されています。利用は館内閲覧とコピーに限られています。

【横浜開港資料館】

ペリー来航の際に日米和親条約が締結された地に建つ、旧イギリス総領事館を利用して創られた資料館です。江戸時代から昭和初期にかけての国内外の横浜関係の資料17万点余が収蔵されています。この資料館の一室に閲覧室があり、館員によるレファレンスのほか、コピーもできます。また横浜で発行された日本最初の日刊新聞・横浜毎日新聞や各種英字新聞の複製本が自由に閲覧できＮＤＣによらない独自の分類で資料の目録やカード化がなされています。

【神奈川県立博物館】

旧横浜銀行本店を利用した、純ドイツ・ルネサンス様式の青銅ドームの風格ある建物で、古代から現代までの神奈川県の文化・歴史がわかるように展示されています。ここの一室にミュージアムライブラリーとして、レファレンスサービスは勿論、図書の閲覧や映像資料の利用もでき、またデータベース化された収蔵資料の端末による検索システムによる情報提供も行なわれています。

【神奈川近代文学館】

神奈川ゆかりの文学者たちの資料が展示されています。別棟に閲覧室もあり貴重な図書や雑誌の閲覧（座席数28）やコピーもできるようになっています。

このように、見学した全ての博物館にそれぞれ特色ある図書室がありました。それではこうした博物館と図書館の関係は、いつごろから始まったのであろうか。

元来、図書館は歴史的にも博物館と密接な関係があったようで、紀元前３世紀にエジプトのアレキサンドリアに設立された古代世界最大の図書館は、ムーセイオン（mouseion）の一部として設立されたものである。

近代における代表的なものには、大英博物館図書館があります。1759年の創設以来、図書館は博物館とひとつの組織のもとで発展してきました。この関係は1973年に大英図書館として分離独立す

るまで続きましたが、実際は大英博物館図書館、国立中央図書館、国立書誌局等複数の機関を一つの組織にまとめたものでした。ちなみに新大英図書館は、1975年にイギリス政府により一個所にまとめる計画が立てられ、1982年に建設が開始、1998年６月女王陛下出席の式典をもって正式に開館するにいたった。蔵書数は約1200万冊、11の閲覧室がある。このうち人文書室２、古書室の計３室のみの開館で、全館が利用可能になるのは今年の春の予定である。また、観光客も利用できるジョン・リトブラット・ギャラリーには、世界最古の新約聖書の写本、マグナ・カルタ、ビートルズの歌の草稿など至宝の一部が展示されている。

わが国の近代図書館は、明治５年に文部省により東京湯島博物館（旧昌平坂学問所）の中に書籍館を建設したのが始まりである。この書籍館は、明治７年に浅草に移され翌８年に博物館所属浅草文庫として開館（内務省所管）した。この浅草文庫は、明治14年に上野公園に新設された博物館の建物の一部に移転することになり、翌15年博物館書籍室として開館（農商務省所管）したが、明治17年太政官に太政官文庫が創設されるとともに、全ての蔵書が太政官文庫に移され閉鎖されることになる。後にこの太政官文庫は内閣文庫と名称を変え、戦後は国立公文書館に移されています。

一方、文部省所管の書籍館の復活が望まれ、明治８年東京書籍館としてもとの書籍館があった昌平坂学問所跡に開館することになった。しかし、明治10年西南戦争の勃発による政府の財政難の影響で閉館、東京府に蔵書と建物が交付され東京府書籍館として運営されることになる。この東京府書籍館もわずか３年で文部省に返還され東京図書館と改称、利用者数も増加していくなか時代の要請に応えるため新国立図書館の建設が必要となり、明治17年建設予算の内示もあったが翌18年東京教育博物館と合併することになり、上野の博物館の施設内に移転した。その後明治39年帝国図書館が開館するに及んで旧館は廃止された。戦後の昭和22年に国立図書館と改称、業務を継続していた。翌昭和23年に国立国会図書館法が可決、旧赤坂離宮の建物に衆参両院の蔵書が移され開館するにおよび、その支部図書館として組みまれたのである。

このように、わが国では大英博物館図書館のように当初から博物館と図書館を一体化したものではなく、政府の事情によって統合あるいは分離しつつ今日に至っているのである。

博物館については、昭和27年に現行博物館法が施行されるに及び、博物館の機能の明確化、新しい博物館の在り方が設置、運営の両面から規定されることになった。この中で注目すべきは、第３条３項である。すなわち「一般公衆に対して，博物館資料の利用に関し必要な説明，助言，指導等を行い，又は研究室，実験室，工作室，図書室等を設置してこれを利用させること」と記されており、一般利用者の博物館資料研究のための図書室設置に触れている点である。

以上見てきたように、わが国の図書館と博物館の関係はその時によって紆余曲折がり、戦後は図書館と博物館の機能は分離しそれぞれに発展してきている。すなわち図書館においては、資料の閲覧という利用者のサービスに重点が置かれているために、古い文献資料のような特殊なものは、整理が進められていないのが現状であろう。仮に整理されていても、その閲覧あるいは複写といった利用の点からすれば、制約のあることが多い。博物館においては、閲覧よりも資料を展示することに重点が置かれ、展示さえすればその目的を達成できたかに思われなくはない。極端な言い方をすれば、館蔵資

料の利用は館員（学芸員）だけと受け取れかねない博物館もある。

もちろん冒頭で述べたように、博物館でも図書館や図書室を併設し利用者の閲覧に供している所もある。それでは実際にどれ位の博物館が、図書館（室）あるいはそれに類する施設を設置しているだろうか。上記において横浜のことを例示したので、この際だから神奈川県全体について調べてみることにしました。

日本博物館協会編「全国博物館総覧」（1986年刊、1998年10月差替え）によると、県全体で118館の博物館があり、この中で関連施設と思われるものがあるのは20館となっている。これを列記してみると以下のとおりである。（ただし上記の４館は除く）

厚木市立寿図書館郷土資料室（図書館内に併設）・伊勢原市立子ども科学館（図書館と併設）・岩崎博物館（図書室）・大佛次郎記念館（図書室）・小田原市郷土文化館（図書室）・北鎌倉美術館（図書館）・京急油壷マリンパーク（図書室）・黄庵今昔民俗研究所（図書館）・シルク博物館（図書室）・羽太郷土資料館（図書室）・横須賀市自然博物館（図書室）・横浜市八聖殿郷土資料館（図書閲覧室）・横浜水道記念館（図書・ビデオコーナー）・横浜マリタイムミュージアム（ライブラリー）・横浜市歴史博物館（図書室）・神奈川県立青少年センター（こども図書室）

これらは直接見ていないので、利用者のための施設なのか、館員のための施設なのか判断できかねるものもあるが、全国的に見てもその割合は高い方に位置する。図書館にしろ博物館にしろ、その対象とするところは利用者である。博物館において、こうした図書館的な施設が増え資料の利用が可能になれば、利用者にとっては大いにプラスになるはずである。

博物館図書館（室）について、その概略を述べてみたわけであるが、その実情については資料の制約上調べることができなかった。これを機会にもう少し調べていきたいと思いますので、関連資料等ご存じの方があればご教示願いたい。

参考文献

角家文雄編著「日本近代図書館史」　1977年　学陽書房
佐藤政孝著「図書館発達史」　1986年　みずうみ書房
前島重方・志保田務編「図書館概論」（「新・図書館学シリーズ」１）　1998年　樹村房
北嶋武彦編著「図書館概論」（「新現代図書館学講座」２）　1998年　東京書籍
岩猿敏雄ほか共編「新・図書館学ハンドブック」　1984年　雄山閣出版
「新・大英図書館への招待」　1998年　ミュージアム図書
網干善教ほか編「博物館学概説」　1985年　佛教大学通信教育部
加藤有次著「博物館学序論」　1978年　雄山閣出版
富士川金二著「増補改訂博物館学」　1971年　成文堂
伊藤寿朗・森田恒之編著「博物館学概論」　1978年　学苑社

（よしおか・よしのぶ　別府大学図書館事務参事、非常勤講師）